

前置詞句の構造と疑似受動文について

本田隆裕 (Takahiro Honda) e-mail: hondat33@gmail.com

大阪大学大学院文学研究科

1. 序

- 以下のような例を疑似受動文と言う。
 - (1) This bed was slept in (by Obama).
- ただし、(2)のような文は容認されない。
 - (2) a. *The tree was sat under/beside/in by Bernie.
 - b. *The station was arrived at (by Obama).
 - c. *Tuesday was departed on by Bill.

((a, c) C&J (Culicover and Jackendoff (2005)): 207)

2. 再分析(Reanalysis)とその問題点

- H&W (Hornstein and Weinberg (1981))は、動詞とそれに隣接する前置詞を結合し、一つの複合動詞を形成する再分析(Reanalysis)を提案
- しかし、(3)のように動詞と併合されない前置詞句においても、前置詞 P はその補部 DP に格を与える。
 - (3) a book about Chomsky

P と DP が併合(merge)された段階で DP は格を付与されている。
再分析が成立するためには、D 構造や S 構造を仮定しなければならない。

3. 「特徴づけ」という概念

- Takami (1992), 高見 (1995)
 - (4) 英語の疑似受身文は、主語がその受身文によって特徴づけられている場合に適格となる。
(高見 (1995: 59))
- ただし、なぜ疑似受動文が英語など一部の言語でのみ可能なのか明確にされていない。

4. 本発表の目的

Takami (1992), 高見 (1995)の「特徴づけ」の考え方を統語論の枠組みで捉え直し、疑似受動文についての分析を新たに提案する。

5. 提案

- Svenonius (2003)は Talmy (1978)に基づいて、前置詞も他動詞と同様、外項(Figure)と内項(Ground)を取ると主張した。

“...the Figure is the entity in motion or at rest which is located with respect to the Ground ...”
(Svenonius (2003: 432))
- 疑似受動文が存在する言語では、(5)–(7)に示す 3 タイプの前置詞句が存在する。
 - (5) [_p*P Figure [_p* [_{PP} P Ground]]]
 - (6) [_{pP} P [_{PP} P Ground]]]
 - (7) [_{POBLP} P_{OBL} DP]
- Chomsky (2001)

他動詞句 : [_v*P 外項 [_v* [_{VP} V 内項]]] = (strong) phase
非対格動詞句 : [_{vP} v [_{VP} V 内項]] (strong) phase

- v^*P と vP の関係が、(5)の p^*P と(6)の pP と同様であると仮定する。¹

(5) [$_{p^*P}$ Figure [$_{p^*}$ [$_{PP}$ P Ground]]] = (strong) phase

(6) [$_{pP}$ p [$_{PP}$ P Ground]] (strong) phase

- p^*P / pP 内の P 自体は DP に格を付与せず、 p^* が v^* と同様に probe として機能して goal に対格を付与。
- (6)の Ground は pP の外の probe によって格が付与される。
- P は、 p^* , p に付加する。(see Svenonius (2003))
- Svenonius (2003)によれば、Ground は何らかの要素の参照点として機能する。
 - (5)の Ground . . . Figure の参照点
 - (6)の Ground . . . pP の外の要素(e.g. 動詞の Agent)の参照点

6. 分析

- Takami (1992)の分析に従えば、(1)の *this bed* は *Obama* が眠ったという事象によって特徴づけられている。

(1) This bed was slept in (by Obama).

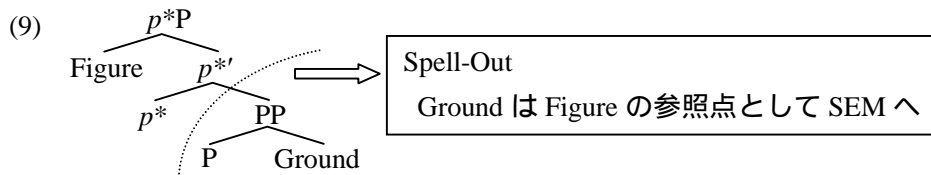
- なぜ(8)の *Boston* は同じ事象によって特徴づけられないのか？

(8) a. Obama slept in Boston.

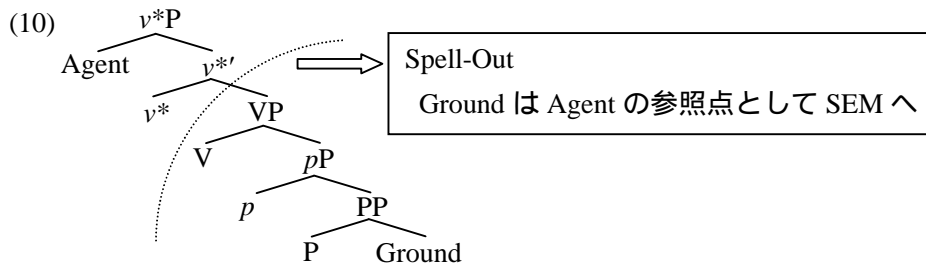
b. *Boston was slept in by Obama.

- (8)の *Boston* は、「眠る」という事象とは直接関係なく、*Obama* の存在地点を指しているだけ。

- (8)の *Boston* は *Obama* という Figure の参照点として解釈される。



- (1)の *this bed* は *Obama* という *sleep* の Agent の参照点として解釈される。



- Figure は前置詞の外項（動詞の外項ではない）
- Figure の参照点は、疑似受動文によって特徴づけられない。
 - (8b)の *Boston* は Figure の参照点であり、疑似受動文によって特徴づけられない。
- 動詞の外項である Agent の参照点は、疑似受動文によって特徴づけられる。
 - (1)の *this bed* は Agent の参照点であり、疑似受動文によって特徴づけられる。

7. 統語構造

- (1)の *this bed* を含む前置詞句は Figure を外項として投射しない。(6)の構造
- (8)の *Boston* を含む前置詞句は Figure を外項として投射する。(5)の構造
- 藤田・松本 (2005) : 非能格動詞文の軽動詞は、他動詞と同様に v^* 。
- (1)に対する能動文(11)は、(12)のような構造である。

¹ Chomsky (2001)とフレームワークは若干異なるが、Pesetsky and Torrego (2004)でも対格を付与する P と付与しない P (defective preposition)の二種類の P が仮定されており、後者のみ疑似受動文が可能であるという考え方が示されている。

(11) Obama slept in this bed.

(12) [CP C [TP Obama_k [T [_{v*P} t_k [sleep_j + v* [VP t_j [_{pP} in_i + p [PP t_i this bed]]]]]]]]]]

・ p は probe ではないので、this bed は v* と一致して対格が付与される。²

(13) [CP C [TP Obama_k [T [_{v*P} t_k [sleep_j + v* [VP t_j [_{pP} in_i + p [PP t_i this bed]]]]]]]]]]

一致

・ Chomsky (2001)によれば、受動文の軽動詞は v であり、(1)の派生は(14)のようになる。³

(1) This bed was slept in (by Obama).

(14) [CP C [TP this bed_i [T-was [_{vP} sleep_k + v [VP t_k [_{pP} in_j + p [PP t_j t_i]]]]]]]]

・ this bed は T と同じ phase 内にあり、T にとってアクセス可能で一致できる。

・ 一方、(8a)は(15)のような派生であると仮定する。⁴

(8) a. Obama slept in Boston.

(15) [CP C [TP [DP Obama]_i [T [_{v*P} t_i [sleep_k + v* [VP t_k [_{p*P} PRO_j [in_i + p* [PP t_i Boston]]]]]]]]]]

・ Boston は Obama の存在地点を指しているだけ。

Obama にコントロールされる PRO が Figure として投射される。

・ Boston は p* と一致し、対格を付与される。

・ (8b)の派生は、(16)のようになる。

(16) [CP C [TP [T-was [_{vP} sleep_j + v [VP t_j [_{p*P} PRO [in_i + p* [PP t_i Boston]]]]]]]]]]

・ Boston は p*P phase 内にあり、フェイズ不可侵条件(Phase-Impenetrability Condition)により T にとってアクセス不可能である。

・ C&J は、(2a)の前置詞句は動詞の項であるが前置詞の選択が比較的自由であると主張している。

・ the tree は、sit の Agent の参照点として機能しているのではなく、単に Bernie という実体との空間配置関係を述べるための参照点として機能している。

Bernie にコントロールされる PRO が Figure として投射される。(17)

(17) [CP C [TP [T-was [_{vP} sit_j + v [VP t_j [_{p*P} PRO [under/beside/in_i + p* [PP t_i the tree]]]]]]]]]]

受動化によって特徴づけられる前置詞句の補部 動詞の外項の参照点

Figure が投射されない。 phase ではない。⁵

受動化によって特徴づけられない前置詞句の補部 Figure の参照点 phase である。⁶

・ Figure が投射され得ない場合は、文脈によらず必ず疑似受動文が可能。

(18) Bill was laughed at (by John).

² 非能格動詞は同族目的語を補部に取り得るが、その場合でも前置詞の補部は v* と同じ phase 内にあるので、Hiraiwa (2005)の Multiple Agree を採用すれば、同族目的語と同時に前置詞の補部も v* と一致すると説明できる。

³ Honda (to appear)では、受動文の軽動詞は v* であると提案している。その分析に従えば、(14)の派生は、次のようになる：

(i) [CP C [TP this bed_i [T' T-was [_{v*P} t_i [_{v*P} IMP [_{v*P} sleep_k + -en_i + v* [VoiceP t_i [VP t_k [_{pP} in_j + p [PP t_j t_i]]]]]]]]]]

⁴ PRO が不定詞や動名詞の主語以外の位置に現れる分析は、Takano (2003)でもなされている。

⁵ (1)の this bed が sleep の Agent の参照点として解釈されない文脈では、Figure が投射され、疑似受動文が不可能になると予想される。

⁶ (2a)の the tree が sit の Agent の参照点として解釈される文脈では、Figure が投射されず、疑似受動文が可能になると予想される。

